

やっと呼吸が整ったというのに。

ネックとノランは、荷車の陰から出現したそれらを前に愕然とした。

新手。

いつもの冷静なネックなら、立て続けに敵が現れても、迅速に対処の策を練るところだ。ノランを落ち着かせ、頭を回転させ、行動を起こすべく再び集中しなければ。

だが、さすがのネックも動けなかった。

邪獣が、三体いた。

おかしい。どうして——零れて当然の疑問は、喉の奥につかえて出ない。

このフィルスト大陸において、邪獣とは、滅多に出くわすものではない。

——確かにそうだったはずだ。

猿のような邪獣がいた。通常の猿より幾倍も大きくまるで人間のようだったが、見まごうことはないだろう。全身の毛を逆立てるその漆黒の体から、黒い霧のようなものが立っているからだ。

その左方には、孔雀のような鳥が長く垂れた尾を揺らしながら、大きな羽を一定のリズムで動かしている。ぬらりと光る嘴は、針のように鋭い。

そして後方には

「おいあれ……」

ネックもノランも忘れるはずがない。

アリーベで二人が遭遇した狼の姿をした邪獣が殺気を纏って近づいてくる。

「こんなの聞いてねえぞ」

明滅する街灯の及ぶ範囲に来て、三体の邪獣の紅い目が爛々とする。

岸に打ち寄せる波の音が大きくなる。

次の瞬間。

ゴオオオオオオ！

それは港に吹き荒ぶ風とは違った。

不自然に渦を巻く風がネック達から三体の邪獣を遠ざけた。

「手助けが必要かね？ 少年」

ネックとノランは声がした方向を振り返る。

「あんたらは……」

声の主は、一昨日『マーデル・プラッタ』の広場の一角で道具の叩き売りをしていた、茶髪を三つ編みにしたロングコートの男——アルノルドであった。

アルノルドの後方には大きな荷車を引いたジョシュアがいた。

ノランは見覚えのある姿に

「確か、マーデル・プラッタにいた……チンドン屋か！」

突拍子もないレッテルに対しジョシュアが顔をしかめ、どしどしとノランに近づいた。

「失敬な！ 誰がチンドン屋ですか！ この方をどなたと心得る！ 知人ぞ知る、聡明にして偉大なる文明開化のアルノルド教授ですよ！」

ノランはジョシュアの勢いに怯みながら、

「な、なんであんたらがここにいんだよ」

しかし、その質問は邪獣の咆哮によって打ち消される。

狼の邪獣がノランめがけて突進した。

ノランは邪獣の爪が空を切るところで左側に身体を回転させて交わした。

「あぶねえ！」

ノランは左手で服を掴み上げ、顔の汗を拭きながら言う。

「手助けってたって、俺らでこんだけ苦戦してんだ。あんたらで何とかなる相手でもねえだろ」

アルノルドは即座に、

「この私なら問題ない」

と言い切った。

間近に邪獣がいるにも関わらず、その場から一步も動くことはない。

「すげえ自信だな。どうするよネック」

ネックはノランからの言葉を待たずとも考えていた。突然現れた素性を知らない自称研究者のこの男を無条件で信用していいのかと。だがこうも考えることはできる。今日の前にいる厄介な存在を対処することが利害の一致になるとも。今度は孔雀姿の邪獣がネックを目掛けて羽を広げて飛びかかってきた。ネックが後方に飛んで避けると、着地した瞬間を狙って邪獣が嘴でつついてくる。ネックは即座に近くにあった木箱を投げつけて邪獣の進路を塞いだ。

ネックはもう一つ考えていた。アリーベで出くわした邪獣よりも、今日出くわした邪獣は明らかに力が強くなっている。このまま暴れられると全員の体力が底を尽きる可能性もある。そうなれば街の人や宿にいるリアムやノアに被害が及ぶかもしれない。

それなら——。

「手伝ってくれ」

そう言わざるを得なかった。

アルノルドはニヤリと笑い、

「ふむ、時間をかけるのは私の主義ではなくてね、迅速かつ、丁寧に。それでいて美しいこうではないか」

「あいつは何を言ってるんだ？」

「一発で仕留めろってことだろ」

「よう分かるな」

ネックはアルノルドと協力体制をとることに決めた。しかしここでは人が多すぎる。街の外に出てしまえばいいが、ここから街の外に出るまでは距離がありすぎる。

「アルノルド、邪獣を仕留める前に奴らを船の係留地まで誘導したい」

アルノルドはネックの意図を瞬時に理解したようで感心していた。

「なるほど、市井の人を巻き込まないように。ということだな」

ネックは邪獣から目を外さないままで

「ああ」

とだけ答えた。

アルノルドはシャツの襟を正した。

「炎は出せるかね？」

「炎？ 出せるけど」

「良いだろう、私が先回りをするから追ってくるといい。着いたら射線上に邪獣を置いて私を狙うんだ。最大火力でね」

「私を狙う？ 最大火力って、丸焦げになるじゃねえか」

このノランの疑問にはネックも同感だった。

ネックやノランの魔力を見誤っているのか、あるいは研究開発品でも使うのだろうか。

「青髪の少年、君も手を抜くなよ」

アルノルドがネックに釘を刺した。

この人から不安の文字は感じられない。

「ジョシュア君はここで大事な研究開発品を見てくれたまえ。万が一、キズでも付いたら売り物にならないのでね」

「はい！ お任せください！」

ぶん、と、猿の邪獣が手近に落ちていた木箱の破片を投げた。

アルノルドは火をまとった右手で、虫を払うようにしてそれを落とす。

狼の邪獣が咆哮し、地を踏み抜かん勢いで蹴った。

それを引き金に、他二頭の邪獣も一行に向かって動き出す。

「行くぞ！」

アルノルドが一目散に走り出すとネックとノランも振り向いて、船の係留地へと駆け出した。

と、アルノルドのいた場所に、孔雀の邪獣の羽が「すととと」と突き刺さる。羽を矢として射った孔雀の邪獣は宙返りをし、空を滑りながら追撃の構えを取る。

邪獣と人間の速度では比にならない。ものの数秒で追いつかれるのは明白だ。しかしアルノルドも人離れした走力で先頭を維持し続けた。ネックとノランは大きく差をつけられながら必死に走った。

「あいつなんであんなに速えんだよ!？」

係留地までまだ少しある。が、邪獣がわずかに射線上に入ったのを見逃さなかった。

「撃て!!」

アルノルドが叫ぶ。

「本当に大丈夫なのか!？」

「やるしかねえだろ」

アルノルドが合図をした。刹那、ノランは振り向いて腰を深く落とし、地面を踏む両足にぐっと力を溜め、両手のひら突き出して、

「うらああああああああ!!」

アルノルドの眼前に迫っていた孔雀の邪獣へ向かって、最大魔力の魔法——火炎柱の魔法を放った。ネックもノランに続いて手のひらから火炎を出した。

轟音を上げながら、ノランの両手のひらから丸太のような火柱が噴き出す。あたりが一気に明るくなり、空気が熱でぐにゃりと歪む。火の粉を散らしながら、うねる炎がまっすぐに三体の邪獣へと伸びる。火炎は先頭のアルノルドも包み込んでいく。

ネックは大きく息を吸い込んだ。

そして、ポケットから砂時計を取り出すと砂溜まりを上に向ける。

「……！」

瞬間。

この世界から、音が消えた。